

校務におけるデジタルトランスフォーメーション (DX)

DX : デジタル技術を浸透させることで人々の生活をより良いものへと変革すること

鹿児島県立指宿養護学校 教諭 松山 伸吾

■ 出会い

初めて Google フォームに出会ったのは、平成 27 年に、同僚がアンケート方法を模索していた時です。「こんな Web アンケートがある。」と映し出したスクリーンを、私も隣で見っていました。そのときは、瞬時に集計ができる Web サービスがあることに驚いたのを、今でも覚えています。その後、Web アンケートで実施できたら便利かもなと思うことはあったものの、新しい取組には物怖じしてしまい、その後も例年通りの紙面アンケートを行っていました。

■ 紹介

転機になったのは、令和元年度に受講した高等学校等情報教育継続研修の中で、Google フォームを使って、実際にアンケートを作成したことです。そのとき学んだ、作成や集計の簡単さに、「やはり、これは活用していかないともったいない。」と、遅ればせながら再認識しました。その後、校内での情報研修で活用方法等を紹介しました。当時は、まだ県域アカウントが利用される前だったので、アンケートデータを共有しやすくするために、校務アドレスでのアカウント取得からしなければなりません。それでも、職員からの評判は上々で、Google フォームを使って校内行事等のアンケートを実施する職員が徐々に増えていきました。

■ 活用 1 と効果

職員向けの学校評価アンケートでも、Google フォームを利用していきました。それまで、紙面に書かれた内容を複数人で入力し、集計していた作業を自動化することで、作業効率が上がり担当職員の業務改善に大きく貢献できたと感じています。将来的には、会議の資料がペーパーレス化されれば、リンク先のアドレスをクリックして集計結果を閲覧できるなど、Google フォームのメリットを最大限に活用できるのではないかと思います。

■ 課題と改善策・・・の課題

Google にログインせずに回答する場合、回答率 100% 達成が難しいことが分かりました。それは Google フォームの匿名性と手軽さ故です。その対策として、Web 上での回答と同時に、バインダー

で閲覧板を回すことにしました。Web 上で回答した人は、閲覧板にチェックし、未回答の人はチェックをせずに次の職員に回します。回答が済まない限り閲覧板が回ってくるので、未回答も防げます。しかし、Web 上で回答したものの、閲覧板が回ってくるまでの時間差があると、記憶が曖昧になり、再度アンケートに答える職員も出てきました。そのため、合計回答人数が合わなくなったり、未回答者の把握が閲覧板でしかできなかつたりと、新たな課題が見つかりました。

■ 再改善策

回答者にとって一手間はかかりますが、Google に県域アカウントでログイン後、回答回数を一回に制限できる機能を有効にし、アンケートに回答することで、重複回答を防ぐことができました。さらに、回答終了後に表示される職員名簿に回答者自身が直接チェックをすることで、誰が回答済みかを確認することができました。これにより、匿名性と手軽さを確保しつつ、未回答者をリアルタイムで把握できるようになりました。

■ 活用 2

ネット環境さえあれば、Web 上で回答できる手軽さがあります。ただ、研修会等でのアンケートは、一度会場を離れると、回答することがなかなか難しいようで、回答率が極端に低いことがありました。それを受け、その後の研修会では、紙面アンケートのときと同様に、会場でアンケート入力時間を確保することで回答率を格段に上げることにつながりました。

■ 展望

学校教育現場の ICT 環境は年々変化し続けていきます。その変化の全てを受け入れ、対応していくことは非常に難しいことです。また、全く対応していなくてもさほどデメリットは感じないかもしれません。それでもなお、対応可能なところを試行錯誤しつつ取り入れていくことが、業務改善につながると思います。Google フォームの活用は単なる作業の効率化だけではなく、これまで以上に児童生徒と向き合う時間や職員が学校以外の外の世界に目を向ける時間をも生み出すきっかけになるのではないかと考えています。